



浦島伝説

やまない、雨はない

嫌なことがあっても、それがずっと続くことはない。いつか必ず明るい未来が訪れるという意味です。同名のドラマや歌もあります。コブクロの代表曲『桜』の中にも、♪花びらと同じだけ生きていく強さを感じる 嵐吹く風に打たれてもやまない雨はないはずと～という歌詞が出てきます。また、同じような意味で、マラソンの高橋尚子選手の座右の銘である「何も咲かない寒い日は、下へ下へと根をのばせ。やがて大きな花が咲く」という言葉も有名です。

さて、うっとりしい梅雨の季節になりました。勉強や友達関係で悩むこともあるでしょう。でも、だからこそ、じっくりと自分自身を振り返り、今自分は何をしなければならぬのかをしっかりと考えてください。それが「DREAMS COME TRUE」につながります。夢への第一歩は、“ここから今はじまる”のです。

「好きなことを仕事にしよう」といって、中学生に職業を紹介する本がありますね。私は、すごく危険なメッセージだと思っているんです。

確かに夢を持つことは大切でしょう。でも、みんながイチローになれるわけではない。好きなことで仕事に就ける人なんて珍しい。夢へのこだわりだけがあおられると、その先は「夢追い型」フリーターです。むしろ人間はいろいろな挫折を積み重ねていく。でも、それが必ずしも悪い経験ではなくて、それぞれのその後の堅実な人生につながっていく、というモデルを示してあげるべきです。

将来については、方向感覚程度に「自分はこっちかな」とつかんでおけば十分。何になりたいかなんて、思い浮かばなくて当然です。ただ、いつの日か「本気でやってみたい」何かが出てきたときに手遅れにならないよう、今できることはやっておいてほしい。

人生で、中学時代が一番しんどいと思います。「中学生を分かりたい」という本を1999年に仲間と出したとき、中学生の日常に密着したことがあります。彼らとはとにかく友達関係に気がつかう。常に周りの反応をみて立ち位置を決め、キャラを演じる。今は携帯電話やネットもあって、もっと大変でしょう。家に帰っても「即レスしなきゃ」と気がつかうわけですから。日本の子どもたちはとても狭い「世間」のなかで、同調圧力にさらされながら生きている。専門用語でいうと「親密圏」が重たすぎるんです。

コンビニの前で、よく中高生がたむろしていますよね。彼らは親密圏の仲間にはとても気がつかっているんです。でも逆に、周りの「公共圏」には目が届かず、通行の邪魔になっていることにも気付かない。親密圏にあれだけエネルギーをつかう毎日を送っていると、すっかり消耗してしまい、公共圏、つまり外の世界はどうでもよくなっていくのではないかと心配です。

大事なのは、社会に関心のアンテナを張ることです。先生に言われたことだけをやるのではなく、「あれっ」と思ったことを自分でどんどん調べ、世界が広がる体験を味わってほしい。親御さんも、幼い我が子が道端に座り込んでヘンなものに興味を持ったとき、「ダメじゃない」と叱らないでください。「それは何だろうね」とひと声かけてあげるだけで、その後の関心の持ち方が全然違ってくると思います。

※ 児美川孝一郎（法政大キャリアデザイン学部長） 朝日新聞(6/6)から引用

数字が語るもの

17005円 「心のきずな61キャンペーン」（東日本大震災PTA支援活動）で集まった募金額です。40名の方がご協力くださいました。ありがとうございました。

9478kw 5月の電気量です。昨年と比べると、1.6%減となっています。わずかですが、これで2か月連続しての減少となりました。引き続き、トイレや廊下の節電を心がけましょう。

